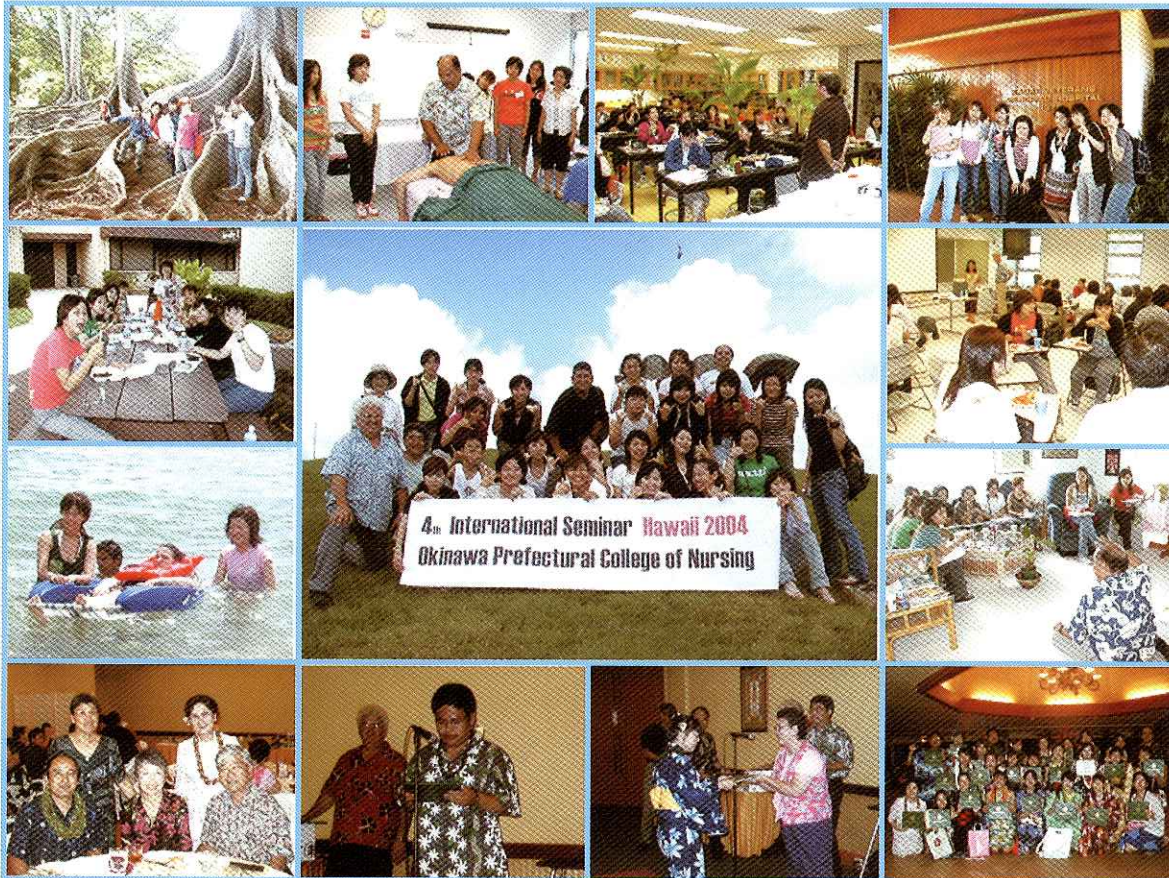


# かせかけ

編集 沖縄県立看護大学  
広報・情報委員会  
発行 平成17年7月31日



## 目次

- 遠隔communicationの促進—教育研究および実践活動において……………2
- シリーズ教育研究分野の紹介  
精神保健看護……………3
- 教員紹介(よこがお)  
安谷屋 均教授……………4
- 本学の学部カリキュラム検討について……………5
- 国際小児腫瘍学会に参加して……………6
- 平成16年度卒業論文発表会から思うこと……………7
- 沖縄県立看護大学学務課に勤務して……………8
- サークル活動……………9
- 教職員の動き……………10
- ゆるゆるの空間……………12



## ※ 遠隔communicationの促進 教育研究および実践活動において

学長 上田 礼子

本学の教育研究目標の中には地域で生活する人々の健康促進、健康教育、疾病予防とケア、リハビリテーション、ターミナルケアなどが含まれています。沖縄県には約40の有人離島があり、これらの島々で生活する人々の健康上のニーズを看護専門職者の立場から把握して適切に対応するには従来の看護学校や大学基礎教育からの卒業で終結する教育では充分ではありません。日進月歩する保健医療と急速に変化する生活環境に伴って生じる健康上の問題や課題を解決するには教科書だけの知識では十分ではなく卒業後も継続して学び続ける必要があるからです。特に、離島で働く専門職者にはこれまで継続して学ぶ機会に恵まれていなかったといえるでしょう。

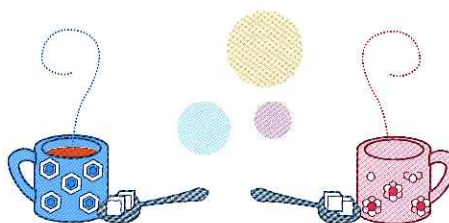
しかし、遠隔通信技術の進歩はそのような障害を取り除く役割を果たし始めています。いわく、遠隔教育、telehealth、telenursingなどです。本学はこれらの遠隔communication技術を駆使して地理的、時間的制約を克服することにより、clientsの相談に対応し専門家としての支援活動が可能となる試みを離島Kをモデルに開始してきています。歴史的には1999年の大学開設当初からこのような構想はありましたが、本学に適した遠隔システム機器整備や施設設備のための予算確保および技術面の準備にこれまで時間をとられ本格的な活動はできませんでした。しかし、2004年4月の大学院博士前期課程および後期課程の設置を契機として遠隔教育およびtelehealthは、いよいよ2005年4月から現実のものとなりました。

新しい遠隔communicationシステムFCS

(Flash Communication Server)は東京医科歯科大学生体機能支援システム研究室と本大学との共同で今後は発展的開発運営がはじまります。このシステムの特徴として設備面：1) 遠隔教育に関して講義担当者および受講者の経済的負担がなく(提供者のみ負担) 2) 場所、時間を限定しないこと、機能面：1) 学生あるいはサービスをうけるclientsはPCの単純な操作により利用可能、文字、音声、画像によってcommunicationできる 2) 自動的処理可能—基本整理や基本統計 3) 結果を利用者のclientsやサービス提供者に提供可能などがあります。利点として 1) 海外、県内外など遠隔地からの講義 2) 交通便利性に欠ける遠隔地からの受講あるいは相談 3) 大学院生あるいは相談者との直接的communication 4) セミナーの開催、研究会打ち合わせ、専門職者からの直接的指導や助言などに活用できるなどをあげることができます。総じてこの新しいシステムはPCと携行可能なWebカメラを伴い、操作が複雑でなく実用的であるといえます。新しい遠隔communicationシステムの導入と活用によって本学の教育研究と地域サービス提供とに質的向上がもたらされることを期待しています。

このような遠隔システムを活用した教育研究、地域サービスの開発は最近学術振興会から研究補助金をえてNew Zealandの4つの大学を視察した経験からも今後に発展が期待される分野の一つといえるし、本学が着実な取り組みを行なうことによって沖縄県のみならず、類似した条件にある日本、世界にも貢献できるものと考えています。 2005年2月

シリーズ 教育・研究分野の紹介



精神保健看護

現代社会における様々なストレスの増大、自殺者の増加、子供や高齢者の虐待、ひきこもりやNEETの増加等々、精神保健的な問題がマスコミに取り上げられない日は無いと言っても過言ではありません。また精神医療の進歩に伴い、病院での入院治療から地域ケアへと精神障害の治療に対する考えも大きく変換しつつあります。さらに当事者の参加を含め、精神障害者の地域生活を支えるために様々な専門職が関与するようになってきています。その一方では、医療の進歩による長期療養者が増えることによって、精神科と他の診療科の連携がますます必要となってきています。

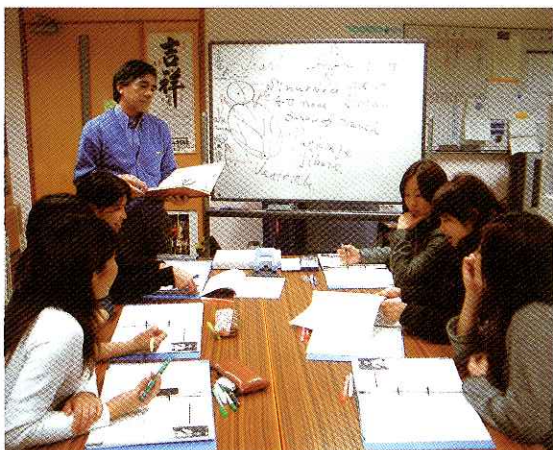
このように、精神保健看護の対象とする領域は、各年齢層にまたがり、多様性を増しています。これらに対応する人材の育成をめざして学部レベルでは、精神保健看護の歴史の変遷と現状、心の発達や精神の健康・不健康、精神疾患と看護等の基本的問題について学びます。実習では、精神障害者を身近な存在と

感じてもらう事を目的として、社会復帰施設での実習からスタートします。学生は最初は緊張しているようですが、「自分たちと全く変わらず、悩みながらも普通の暮らしを願っている」「適切な支援があれば、症状や障害があっても地域での生活が可能である」という、障害を持つ人々の生活の実際を理解できる様です。次に精神疾患患者の理解と看護が深まってゆくことをめざして、病棟実習を行っています。大学院レベルでは、精神保健看護上の様々な課題を国内外にわたって系統的・総合的に捉え、問題の把握とその解決のための研究方法について学ぶ事を方針としています。

これまで精神保健看護は、當山教授、大川講師、田場助手、伊礼助手の4人のスタッフで教育・研究を行ってきましたが、大学院の設置に伴い栗栖教授を加えて体制を強化しました。栗栖教授は主に大学院教育担当ですが、週に一度教員と大学院生二人も交えた領域勉強会を開催しています。スタッフは慣れない英語に四苦八苦しながらも、現在の精神看護ケアの根拠となった文献や最新の文献等に触れ、そこから得た知識を教育・研究に活かそうとしています。また領域全体での取り組みとして、県下の精神障害者家族のニーズ把握を目的とした調査研究も行っています。



## 教員紹介 (よこがお)



〈毎週1回のゼミ〉

## 大学での講義

教授 安谷屋 均

沖縄県立看護大学に赴任して1年半が過ぎようとしています。沖縄での生活も慣れてきました。

赴任前は東京医科歯科大学難研循環器病部門で不整脈の基礎的な研究を主なテーマとし、その発生機序や抗不整脈薬の有用性などを解明してきました。また、医学部生や大学院の学生などの教育などにも携わってきました。この経験を生かし県立看護大学生にも同様の教育方針で現在取り組んでいます。学部では、特に1年生が中心ですが、人体機能学(生理学)、形態機能学(解剖学)、薬理学など基礎医学系を担当しています。これらの教科は臨床医学を把握するのに重要ですが、1年生にとっては、難しく、とっつきにくい科目です。

そこで、日常生活で疑問に思う「からだの働きやしくみ」や最新医学に関するトピックス(新聞やテレビなどの)などを取り入れ、できるだけ興味をもたせる事から授業を行って

ます。

講義以外にも人体構造・機能学演習、病態生理・疾病学演習など骨格の作成や正常機能を中心とした検査そして異常組織像などを各グループに分け、担当しています。

しかし、これらの講義・演習を1人で担当・指導するのも限界があるので、基礎医学系を担当できる教員が欲しいと感じています。大学院生の講義は「生体機能とリスク(おもに一般生理学、病態生理そして循環器疾患—特に不整脈など)」を担当しています。院生は臨床経験を十分持った人も多いので学部生とは違って専門分野を多く取り入れた講義・指導を行なっています。

講義以外に研究を行いたいのですが、現在、研究実験に必要な機器を早急に揃えつつあります(思ったよりも装置を備えるのに非常に時間がかかっています)。それらが全て整えば実験—研究を開始すると共にその一部を学生の「実験」として組み入れたいと考えています。

最後に、講義以外にゼミ(勉強会)を去年から始めました。毎週1回午後6時(通常の授業終了後)から約2時間程度行っています。内容は1年生で学んだ生理学・解剖学など基礎医学系を再復習することから始まり生活習慣病—特に不整脈を含む心臓疾患など基本的な考え方を教えています。ゼミの特徴は授業とは異なって学生が納得するまで説明し、また、学生の疑問にも答える二方向性をもって行なうところにあります。ゼミへの参加は任意ですが、現在8人(2年生が中心)が楽しく学んでいます。

以上、大学での講義内容の一部を紹介しました。



## 本大学の学部カリキュラム検討について



学部教育プログラム改善部門会議代表 教授 宮地 文子

わが国は、約700大学に280万人の学部学生が学ぶ時代を迎えた。大学進学率の上昇と社会の複雑化・グローバル化に伴い、大学および大学院は多様な人材育成と教育研究の質の向上が求められており、各大学が社会の要請に応えて特色あるカリキュラムを設計することは、現在進行している大学改革の重要な柱の一つになっている。

看護学教育の分野では、少子高齢化社会の到来、高度医療や在宅医療の進展、介護・福祉体制の充実など保健・医療・福祉を取り巻く社会情勢の中で、安全かつ倫理性の高い医療に対する国民のニーズの高まりに応え、資質の高い看護職の養成が強く期待されている。近年急増した看護系大学は、このような看護職の役割・責任の拡大に対応できる人材養成に努力し、各大学が特色あるカリキュラムを開発し、国家資格を有した看護職者として、ある一定の看護実践能力を備えた卒業生を社会に送り出すことが求められている。

本学は、平成16年度に大学院博士前期課程と後期課程を開設し、学士過程では3回生を社会に送り出した。そこで、学部カリキュラムを更に充実・強化するための見直し作業を開始する好機に至ったことから、平成16年9月に「学部教育プログラム改善部門会議」が発足した。

本会議は、本学看護学部カリキュラム改善のための課題と対応策を検討する期限つきプロジェクトで、メンバーは、當山、吉川、嘉手苺、安谷屋、石橋、大湾、玉城、宮城、宮地の9名である。

プロジェクトの使命は、本学の教育理念、

教育目標、カリキュラム編成の考え方を踏まえて、現行カリキュラム改善のための課題を整理し、改善案を教授会に提出することである。平成16年度は現行カリキュラム改善のための課題をまとめる作業をおこない、平成17年度に改善案の検討を予定している。

現行カリキュラムの見直しについては、教員の意見を収集・整理したが、過去に本学の常設委員会や教員が実施してきた様々な教育評価報告、あるいは学生組織による教育評価資料は大変貴重であり、プロジェクトの検討報告にも反映させる方針である。

また、文部科学省に設けられた「看護学教育の在り方に関する検討会」が、看護系大学における〈個性ある大学教育の発展〉と〈看護職の最低限身につけておくべき技術教育〉の在り方を検討した報告書「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」(平成16年3月)、厚生労働省における「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書」(平成15年3月)を踏まえた本プロジェクトの検討結果を3月中にまとめる予定である。

看護学教育の特質は、看護職者が看護基礎課程での学修を基盤に、生涯にわたる看護実践体験を通して研鑽を重ね、専門性を高めることにある。

本プロジェクトは学生たちが卒業後も大学院での系統的学修や実務における各種研修を通して、看護実践能力をさらに高める生涯学習の在り方を視野に入れて、学部教育内容の精選と教育方法の開発を課題にしている。

この場をお借りして、教職員や学生はもとより、日ごろ本学の教育を支えてくださっている皆様のご協力をお願いします。

## 国際小児腫瘍学会に参加して

小児保健看護 助教授 石橋 朝紀子

大学からの支援を受け、私は9月16日から9月19日にオスロで行われた第36回国際小児腫瘍学会に出席することができました。手荷物用バック一つ持ちひとり旅の出発です。成田を朝発ちフランクフルトで乗り換えオスロに着いたのが当地の午後の6時ごろ。空港から特急列車で30分、オスロの市街地に到着しました。外はやや肌寒く小雨模様の天気でした。さっそくサンダルに雨用靴カバーを履きホテルまで石畳の道を歩きました。こぢんまりした町並みの一角にホテルがありましたが、部屋へ入ってみてびっくり。部屋の壁、家具類、ベットカバーが全部赤色。落ち着きませんでした。bathroomだけが白色で落ち着ける唯一の場所でした。

この学会は世界中の医師、看護師、訪問看護師、臨床心理士、保育士、患児とその家族、その他小児がん患児と家族にかかわる人達が参加できます。要するに小児がん患児とその家族を全人的な視点から支援することを目的にしています。看護部門では9月17日から19日までスケジュールが組まれていて、アメリカ、カナダ、ヨーロッパ諸国、中近東、東アジア、中国などから参加していました。日本からは看護部門に小児がん患児に携わっている12名の看護師と看護系大学の教師が出席していました。看護部門の学会のサブテーマは患児とその家族へのサポートでした。現在、小児がん看護に関する研究を精力的に発表されているWoodgateさんの講演を聴くことができ大変勉強になりました。ただ、ヨーロッパの現場のナースからどのようにWoodgateさんの概念を臨床に取り入れていくのかなどの質問があるなど課題が残りました。また、開発途上国のナースによる看護の問題点などについての発表がありました。各国の現実の困難な問題をどのように解決すればよいのか参加者が考える機会になったことは言うまでもありません。ポスターセッションの看護部門ではさ

やかな看護活動の発表などもあり、忘れかけていた基本的なケアのあり方を思い起こさせてくれました。また、国それぞれの環境の中で、看護師や医師などが小児がん患児やその家族のために智慧を絞って活動している様子に刺激を受けました。これからは日本でも研究関係者が現場と連携した活動をさらに進めていく必要性を痛感しました。

発表の合間に近くの町や美術館で楽しみましたが、とくにムンクの「叫び」の絵は盗難事件で見られなかったことは残念でした。この国はセンスのある家具類や家庭用品などを生産しているところで、さすがに素晴らしいものがありそれらを見るだけでも楽しい時間を送れました。チャーミングな洋式便器などは持って帰りたいほどでした。市内のこども病院も見学しました。病棟内のプレイルームは年齢別や遊びの種類によって分けられていてそれらを数えてみると6部屋ありました。そのうえ、家族が憩える部屋も用意されていました。うらやましい程の環境です。さすがに福祉が充実しているお国柄といえるでしょう。

学会のオープニングはノーベル賞受賞式が開催された会場でありました。格調高い部屋でした。しかし、参加者は花より団子。食べ物の取り合い合戦。その様子を二階からカメラに撮っていた人もいました。夕食会ではこれまた、ノーベル賞を受賞された方々が宿泊されたホテルで、その方々が晩餐会をもたれた部屋でありました。いい気分でした。メニューは同じだったかは…?

来年はカナダでこの学会が開催されます。この学会が各国の多くの人達が参加することで、世界の小児がん患児やその家族のQOLを高めるために発展することを思いながら帰国しました。



小児病棟にて

## 平成16年度卒業論文発表会から思うこと

講師 宮城 政也

去る12月17日、本学3回目の卒業論文発表会が行われ、大学生活最後の集大成として78名の学生が日頃の研究成果報告を行った。本学の卒業論文は、統合科目として位置付けられ、「既習学習で得た知識、技法等をもとにして自らテーマを設定し、その課題を解決する一連の過程を通して論文を作成する」との教育目標を掲げている。学生たちは、4月より各研究室で指導教員との話し合いを重ね、論文テーマを決定し、文献の検索、調査やインタビューの方法を模索、検討し実際のデータ収集、そしてデータの分析、論文作成を行ってきた。実際に自らが主体となって能動的に行うこの大きな経験の中、学生たちは研究を自ら行うことで、その求められる緻密さや段取りの重要性を実感し、自分の論文が出来上がる（形になっていく）楽しさや満足感を味わえたのではないだろうか。そして、同時に大学で学ぶということの意義や本質を多少なりとも理解することができ、彼女、彼らの自己概念形成や自己効力感を高めることへと繋がっていったと思う。

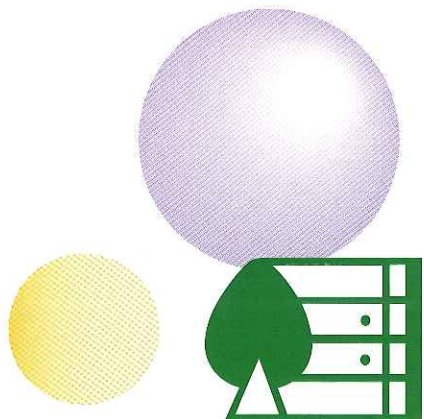
一方、これまでの卒業論文のあり方について学生のニードの部分から少し考えてみたい。



学生たちの多くは、様々な視点やテーマを持って研究室を訪れる。「突拍子もないテーマ」「漠然としたテーマ」「壮大なテーマ」いずれにしても彼らなりに考えたテーマである。その時、学生がやってみたいことと教員が指導できることとのギャップはどのようにして埋めるべきか？あるいは、埋める必要はないとの意見も当然であろう。私たち教員の立場として専門性を重視することは当然である。しかしながら、はたしてそのことが学生たちの学習意欲を満たし、教育目標を達成することになっているのだろうか、その答えに素直にyesとは、言えないような気がする。

より良い卒論教育を提供しようとするとき、私自身、自戒の念をこめながら、私たち教員の認識はどうあるべきか、今一度考えてみる必要があるとの思いが率直に湧き出てくる。ひとつの改善策として、まず幅広い専門性を持って門戸を開き学生を受け入れることが重要なのでは？などと思いつつ、そもそも専門性は各論的かつ深厚であり、幅広い専門などありえないとの指摘を受けそうだが、はたして学生の立場からするとどうなのだろうか…。

たかが卒論されど卒論などといった議論はさておき、新4年生が納得できる卒業論文が仕上がることを祈念して。



## — 沖縄県立看護大学学務課に勤務して —

主査 具志堅 道子

「お早うございます」朝出勤時に学生が挨拶をしてくれます。朝からなんて気持ちが良いのでしょうか。挨拶の上手な学生と気心の知れた事務局の仲間と囲まれ毎日楽しく仕事をしてきました。長い公務員生活で一日中気持ちの良い環境の中で過ごしたのは初めてです。

3年前学務課に赴任しましたときは、これまでの行政の仕事とはまるで違う仕事内容に戸惑いました。どのように先生方や、学生に接したらよいのか解らず右往左往したものです。解らないことがあればすぐ先生方に聞く、学生には彼らの要求が何であるかをよく聞くということをやると自ずと道は開かれました。

先生方が行動しやすいように、又学生には窓口で待たせないようにと思い1人1人と接してきたつもりです。

看護職をめざす学生の歩く姿、学務課窓口での彼らの態度、そのような学生に心の穏やかさを感じます。窓口で私はどれだけ癒されたことでしょうか。学生の皆さん有難うございました。

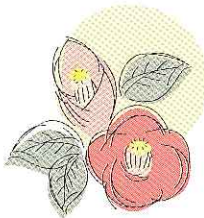
私は若い頃から沖縄の伝統芸能に興味があり、琴、三線をやってきました。琴の流れで着付けがあり(着付師師範)、その流れでお茶がありました(裏千家 茶名 宗道)。お茶はそれこそ総合芸術ですので、陶芸、書、等々心の赴くまま手を染めてまいりました。

2年前学内に三線サークルができた時、どな

たが指導するのだらうと思っていましたら、結局三線歴の長い私が指導することになりました。(野村流音楽協会 教師免許、琉球民謡協会 優秀賞) 県外の学生が何名かいる中、選曲に苦慮しましたが、学生と相談をしながら安里屋ユンタ、島人の宝、童神、芭蕉布等を練習しました。本格的に古典音楽と琉球民謡をやりたいという思いがありましたが、学生の試験、実習等でなかなか時間がとれず難しいものがありました。学生が看護師になり、いつの日かオジー、オーバーを前に三線が弾けたら、又ボランティアができたらと願っております。

又、茶道サークルの学生が時々相談に来るのも楽しいひとときでした。茶道には相手に対する思いやりの気持ちがあります。一碗のお茶を飲んでいただくために心を込めお茶を点てます。たくさんの学生がさわりの部分でもよいのでお茶に接してもらいたいものです。茶道サークルの皆様のますますの精進を願っています。

最後に、公務員の最後の3年間をこの看護大学で勤務できたことに心から喜びを感じています。こんなに気持ちよく退職の日を迎えることができるのですから。先生方、事務局の皆様、そして、すべての愛すべき学生の皆様本当に有難うございました。



(本人：前列右から3番目)



サークル活動



三線サークルの紹介

金城 櫻

三線サークルは三線好きが集まって同好会を立ち上げたのがきっかけで、サークルとして活動を始めたのは2003年4月からです。サークルになって一番にやったことは練習用三線の購入です。実は三線を弾いてみたいという学生も多かったのですが、体験できる三線がなかったため、せっかく遊びに来て聴くだけになってしまうことがありました。しかし、練習用を購入したことで実際に触り、何度か弾いてみることで三線の虜になった学生も多くいます。もちろん「マイ三線」を購入した学生もいます。

現在は学生10人、教職員5人で週2回(月・水)17:30~18:30に活動しています。指導はサークル顧問であり、教師免許を持つ大学職員にお願いしており、初めての人も一ヶ月足らずで弾けるようになっていきます。内容は「かぎやで風」といった古典音楽から「童神(わらびがみ)」といった民謡、「島んちゆぬ宝」といったポップスまで幅広い音楽を楽しんでいます。また、練習の成果は毎年5月の看護大学祭や卒業謝恩会など大学行事に積極的に参加し、発表しています。今後は大学外へも活動の場を広げたいと考えています。三線に興味のある方、ぜひ一度遊びに来てください。



茶道サークルの紹介

島袋 綾乃

私達茶道サークルは「和敬清寂」の心を motto に活動しています。活動内容として、看大祭でのお茶席、学校茶道での活動、さらに緩和ケア病棟でのお茶席も設けさせていただいています。他校との交流もあり視野が広がります。美味しいお抹茶に和菓子、静かに時を感じることでリラックス効果も抜群です。講義の合間に、実習の合間に少しでも癒しの空間を持ちたいと思われる方がいらっしゃいましたら、ぜひお抹茶を飲みに来て下さい。基本的には、時間にとらわれず、自分の空いた時間を利用して活動に参加する方針です。行事が近くなるとお稽古が入ってきますが、気軽に参加して下さい。

茶道サークルに興味を持たれた方、茶道経験のある方、一度でもいいから点てたお抹茶を飲んでみたい方は、4階地域・老年実習室にお越し下さい。少しでも興味を持たれた方、近くの茶道サークルのメンバーに声をかけて下さい。ぜひ一緒に活動しましょう！



## 教職員の動き



助教授 Kathleen B. Cox

Greetings everyone! I am so happy to be here in Okinawa and consider it an honor to be teaching at the Okinawa Prefectural College of Nursing. I was born and grew up in Indianapolis, Indiana which is in the heartland of the USA. My mother who is 97 and a former nurse, is still living there. I think it was because of my mother that I, too, wanted to become a nurse. After graduating from high school, I went to the College of Mt. St. Joseph, in Cincinnati, Ohio where I received a Bachelor of Science in Nursing. I returned to Indianapolis where I held a variety of positions in public health and in hospital nursing. Of course,

I soon realized that I needed to return to school and enrolled in Indiana University School of Nursing where I completed my Masters of Science in Nursing. By this time, my family and I moved to the State of Connecticut where we resided for about seven years. We then moved to Virginia where I worked as Clinical Nurse Specialist. While in Virginia, I again returned to school to pursue a PhD in Nursing Administration. Before coming to Okinawa, I had been teaching at East Carolina University in Greenville, North Carolina. I love nursing and consider it a privilege to assist others to attain and maintain health! I have genuinely enjoyed the students at OPCN and have been very impressed with their commitment, motivation, and hard work!

My hobbies are reading, running, and my five grandchildren who live in Charlottesville, Virginia. I have learned so much since my arrival in Okinawa. I love the food. My very favorite restaurant is Ipei and my favorite meal is ikura maki with miso soup. I thank everyone for making me feel so welcome and at home. "Arigato gozaimasu."

皆さんこんにちは。私は、沖縄に来たことを幸せに思い、沖縄県立看護大学で教えていることを誇りに思っています。私は、アメリカ合衆国の中核地域であるインディアナ州インディアナポリスで生まれ育ちました。現在97歳で、昔看護師であった私の母は現在もそこに住んでいます。私も看護師になりたいと思ったのは母の影響だと思えます。高校を卒業してから、オハイオ州シンシナティにあるマウント・セント・ジョセフ大学(the College of Mt. St. Joseph)に進学し、そこで看護科学学士号を取得しました。その後、インディアナポリスに戻り、公衆衛生や病院看護師として様々な職を経験しました。私はすぐに大学に戻る必要があると気づき、インディアナ大学看護学研究科(Indiana University School of Nursing)に入学し、看護科学修士号を習得しました。その頃に、私は家族と共に、コネチカット州に引っ越しし、約七年間暮らしました。その次にバージニア州に引っ越しし、私は臨床看護専門職者として働きました。バージニアにいる間に、看護管理の博士号(PhD)を取得するため、私はまた学校に戻りました。沖縄に来る前は、ノースカロライナ州グリーンヴィレにある東カロライナ大学(East Carolina University)で教鞭をとっていました。私は看護が大好きで、人々の健康を達成し、維持するお手伝いをするのは名誉あることだと考えます！私は沖縄県立看護大学の学生たちと本当に楽しんでおり、彼らの献身さ、やる気、熱心さに感銘しています。

私の趣味は読書、ジョギング、バージニア州のキャロロッテスヴィレにいる5人の孫です。私は沖縄に到着したときから多くのことを学んでいます。食事もお気に入りです。私の最もお気に入りのお店は「一平」で、好きなメニューは「いくら巻きみそ汁付き」です。私をあたたく迎えて下さり、我が家にいるような気分させて下さる皆様に感謝致します。「ありがとうございます」

教職員の動き



助手 前盛壽美

H16年7月1日付けで母性保健看護助手に着任いたしました前盛壽美(まえもりひさみ)です。出身は八重山(石垣島)です。茨城県の大学を卒業後、沖縄本島で勤務いたしておりました。これまでNICU、産科病棟で助産師として働いてきた自分自身の臨床経験を振り返るよい機会だと考えております。すべてが初体験の毎日にとまどいながらも、あっという間に半年が過ぎました。臨床から離れたことによる寂しさも感じつつ、少しずつ、今自分のやるべきことがみえてきたこの頃です。大好きな母性保健看護領域の楽しさややりがい伝えながら、学生とともに1から学ぶ気持ちで実習指導に関わりたいと思います。研究においても初心者ですが、母と子のこころの健康に着目した子育て支援、妊産婦支援にむけて、微力ながらも力になれると思います。また、趣味でエイサーをしておりますので興味のある方は声をかけてください。



助手 新垣康子

昨年9月8日より成人保健看護助手として勤務しています。これまで県内外の病院等を十数年経験してきましたが、緩和ケアに関心を持ち大学院へ進学しました。

初めての教育という現場で緊張と戸惑いでいっぱいです。年齢のせいかな？新しい環境に適応するのに時間がかかっていますが、気持ちを新たに多くの事を学んで行きたいと思います。本大学で働ける機会を得られたことに感謝し、自分自身を高めるよう努力していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



助手 小林恵子

昨年9月に、小児保健看護学の助手として着任いたしました。

私は看護学生時代に国際協力に対する関心を持ち、これまで国内のみならずアジア、アフリカ、中近東の国々で母子保健分野の仕事に携わって来ました。発展途上国では、保健医療人材の量的充足に加え、急速な医療の高度化、専門化ならびにグローバル化の中で質の向上が求められています。世界の多くの同僚からの「日本にはもっと教育や人材育成の協力をしてもらいたい」という声を受けて、私自身教育分野での経験が必要だと考えていたところ、本大学教員として働く機会をいただきました。

「国際的視野で貢献できる人材の育成」という理念に共感し、入学してきた学生も多いことでしょう。異文化交流の長い歴史を有する沖縄で、学生のみなさんと共に国内外で求められる知識と技術を磨き、成長していきたいと思っております。



助手 渡辺昌子

2004年9月27日より地域保健看護領域の助手として勤務しております渡辺昌子と申します。私は大学卒業後、都内の大学病院での臨床経験を経て、神奈川県横浜市の私立大学で保健師・衛生管理者として働いてきました。学生とともに悩み、教職員と一緒に考える毎日の中で、皆が健康でいきいきとした生活を送ることができるような保健活動と、その基礎となる健康相談の重要性を感じてきました。

沖縄はまさに「いきいき」という言葉がぴったりの土地。美しい海に囲まれた、自然豊かな島全体に活気があふれている印象を受けます。地域の保健師活動も活発で、歴史に裏付けられた保健活動の重みを実感しています。

学生や地域とのコミュニケーションを大切に、多くのことを学びあい、語りあい、元気を出しあえるような活動をしていきたいと思っています。よろしく願い致します。

## ゆるゆるの空間

正面玄関から入って廊下を右へ行くと「保健室」とかかれた表示板が目にはいる。そうです、看護大学の保健室だ。保健室のドアは常時開いている。

保健室にはいると、窓越しに力強く腕を広げたように濃緑色の葉をした蘇鉄がどっしりと生えている。春にはツツジの花や桜の花・山丹花の花が楽しめる。小鳥のさえずりも聞こえてくる。ちょっとしたオアシスだ。夏には高くのびた梅檀の木と琉球黒木の枝っぱいに蟬の軍団が集まり早朝から大合唱が始まる。窓を開けると時に蝶が舞い込んでくることも…。小虫も飛んでくる。蚊もたくさん保健室に入ってくる。蚊は私に遠慮が無い、お腹がふっくらするまで私の血液をちょうだいしていく。

学生が話すには、「先生、保健室はいつでもWELCOMEですね。」という。また、他の学生は「保健室のドアが開いていると学校中が明るい感じ」という。時々保健室へ来る学生が、「気がついたら先生、わたし、ここまで話すつもりはなかったのに誰にも話したことの無いことを今日は話してしまった。」と、こころの鍵をゆるめてほっとしている自分に気づいている。ところがゆるゆるとなり楽になったようだ。絵に興味のある学生が、保健室の一角にちっちゃいギャラリーを作り、ここは癒しコーナーにしようとパソコンで描いた絵を飾った。落ち着ける雰囲気ができたと喜ぶ。ゆるゆるの空間に暖かみがでた。

私たちの生命は呼吸することで生かされている。自然呼吸が楽にリズムカルにできているときは気持ちがゆるゆるとなり心地いいものである。人間のこころもからだもゆるゆるの自然体を求めている。保健室にはゆったりした呼吸が楽しめるゆるゆるの空間がある。その空間をもっともっと広がりのあるものにしたい。

宮城 利恵子

かせかけとは、琉球古典舞踊女七踊りの一つです。総とは紡いだ糸を巻く道具で、総掛けとは布を織る糸をこしらえている様子を指しています。この踊りのように丹念に糸を紡ぎ布を織って着物に仕立てていく、その一途の心と「技術」・「感性」は、「知識」の継承・創出とともに、本学の看護職者を生み育む教育・研究の原点に相通ずるものであろうと、広報誌の名称にしました。



かせと杵

## 編集後記

平成17年は開学7年目を迎え、『かせかけ』は第7号です。古来から世界の七不思議、七色の虹、七福神等でおなじみのように「7」は神秘や奇跡、幸運を意味する数字とされています。縁起のよい今年、『かせかけ』においても古きを大切にしながら、新しい発想も取り入れ、充実した内容にしていく所存です。

教職員及び学生一人ひとりのご協力をよろしくお願ひします。

広報・情報委員

## 沖縄県立看護大学

〒902-0076

沖縄県那覇市与儀1丁目24番1号  
TEL(098)833-8800(代表) FAX(098)833-5133  
<http://www.okinawa-nurs.ac.jp>